

種内変異にみる植物の多様性
Intraspecific diversity in plants
藤井 伸二¹ (¹人間環境大学 環境保全)

私たちは生物多様性を理解する際に、しばしば「種」という概念を用いて生物群を整理・認識している。しかしながら、生物多様性を産み出す進化現象はその作用単位として必ずしも種を基盤にしているわけではない。自然選択説や中立説は集団や個体を進化の舞台としており、集団中での適応度の高い個体の増加や特定遺伝子を持つ個体の増加が進化の実態である。生物では同一種であっても、集団間の変異や個体間の変異が存在し、クローンでもない限り、うり二つのそっくりな個体というのは存在しないはずである。しかし、植物の高次倍数体や水生植物では有性繁殖をほとんど行わず無性繁殖によってのみ集団を維持している例が多い。また、交雑由来の不稔雑種集団が栄養繁殖によってのみ存続している例も少なくない。植物の場合では、個体変異を産み出す有性生殖と偶然に産まれた変異を固定しやすい無性生殖の両方が普遍的に見られる。このことが、植物の多様性の理解を困難にしている一つの要因であろう。一方、雑草のような広域分布種においては、その変異の実態はさらにやっかいである。一例を挙げると、全国に分布する雑草のタネツケバナ(アブラナ科)では、地域集団間にかなりの遺伝的分化のあることが知られている。気象条件が異なる様々な緯度に生育するこの植物が、水田耕作直前に全国一斉に開花するためにはこうした地域分化は必然かも知れない。このシンポジウムでは、種内変異の実態についていくつかの具体例を紹介し、植物の多様性のあり方について理解を深める一助としたい。